

氏名	関本 菜穂子
学位の種類	博士 (音楽学)
学位記番号	博音第161号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉啓蒙時代の音楽理論—ジャン＝アダン・セール著『和声の諸原理に関する試論』(1753)—

論文等審査委員

(論文審査主査)	東京芸術大学	教授	(音楽学部)	片山 千佳子
(論文審査副査)	〃	〃	(〃)	船山 隆
(〃)	〃	〃	(〃)	土田 英三郎
(〃)	〃	准教授	(〃)	大角 欣矢

(論文内容の要旨)

ジャン＝アダン・セール (Jean-Adam Serre, 1704-1788) は、ジュネーヴで自然科学を学び、ウィーンでミニョアチュア画家として活動した後、1750年代初頭をパリで過ごし、当時の音楽論争や理論書に着想を得ながら1753年と1763年に2冊の音楽理論書を出版している。セールの著作についてはこれまでほとんど研究されてこなかったが、J.-P. ラモーやL. オイラーらの著名な和声理論に対して示されるセールの鋭い見解には、当時のフランスの音楽理論の潮流を理解する上で興味深い視座が含まれている。本論文は、根音バスや短調の起源に関するセール独特の見解が体系的に示されている1753年の『和声の諸原理に関する試論』(*Essais sur les principes de l'harmonie*) を研究対象とし、その言説を詳細に検証することで、18世紀の音楽理論の重要な側面に光をあてることを目的とするものである。

数比や自然倍音列からうまく生成できない短調の起源は、18世紀の多くの音楽理論家を悩ませた難題であったが、セールによる短調の起源の説明には次の3つの特色がある。この問題に取り組むにあたり、C.H. ブランヴィル、ラモー、オイラーら同時代の理論家による短調の生成方法を詳細に検証し、その問題点を指摘しながらも様々な要素を自らの理論に巧みに取り入れた点。比の原理、共鳴の原理、想起の原理といった複数の原理を巧妙に使い分け、短調の起源の証明を試みた点。19世紀ドイツの和声二元論を彷彿させるような、長調と短調、属和音と下屬和音など音楽の様々な要素に対称性をみとめようとし、それをいわば「原理 principe」のようなものとして用いた点である。

根音バスに関しては、音楽理論史上の偉業と賛美されたラモーの根音バス理論の「改良」が大胆にも試みられる。セールは、ラモーの根音バスが必ずしも自然倍音列に基づいていないことに不満を抱き、ラモーが音響体から説明していない不協和音、つまり三和音以外の和音の構成音すべてを、各和音に2つの根音バスを設定することで巧みに基礎付ける。このセールの二重根音バス理論では、根音の音階における位置、つまり音度が常に意識され、厳密には音階の3つの主要音であるトニック、ドミナント、サブドミナントのみが根音バスとなる。根音の進行や調の変化についても、根音バスとその音度の関係から考察され、実践上、頻繁にみられる「modulation」、すなわち転調、あるいは同一調内の調的動きも、音律上の制約や各音の調機能を踏まえながら理論的に説明される。このようにセールの根音バス理論は、19世紀末にリーマンが示した機能と声理論を予感させる興味深いものなのである。

セールは科学者や画家としてある程度認められ、当時の著名な思想家と交流を持てるような立場にあった。セールがパリに滞在し音楽理論に取り組んだ1750年代初頭は、『百科全書』の刊行が1751年に始まり、啓蒙思想がまさにその円熟期を迎えた時期で、その思潮の影響はセールの理論書にもはっきりと刻

まれている。科学者としての教養を持ち、啓蒙思想に魅せられていたセールは、様々な音楽理論書から貪欲に知識を吸収しながらも、ラモーやオイラーらの有名な音楽理論書に対し、その科学的論拠の信憑性については冷静かつ客観的に判断し、必要であれば批判するという態度を失わなかった。音響体の共鳴は、セールにとっても和声理論を基礎付けるための重要な切り札であったが、セールはラモーとは対照的に、唯一の原理としての音響体の在り方に疑問を呈し、複数の原理を巧みに使い分けた。理論と実践のバランスを重視したこと、理性と耳の関係に着目したことなども、上記のような背景と関係していると思われる。

このように、セールが『試論』で示した音楽理論は、同時代の様々な理論書の検証や音楽に関する議論を通して培われたものであり、フランス啓蒙期の思潮や音楽理論史的潮流が深く刻まれたものである。セールの音楽理論書は現代の研究者の間ではあまり重視されていないが、18世紀後半にはJ.-J. ルソー、J. A. ヒラー、C. バーニーら著名な音楽著述家たちがセールの理論に関心を示している。その意味でも、セールの音楽理論書は18世紀フランスの音楽理論を読み解く上で重要な鍵を握っているのである。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、ジュネーヴ出身で科学者および画家として活躍しながら、1950年代初頭をパリで過ごし、1753年と1763年に2冊の音楽理論書を出版したジャン＝アダム・セール (Jean-Adam Serre, 1704–1788) の音楽理論書『和声の諸原理に関する理論 Essais sur les principes de l'harmonie』(以下、『和声の諸原理』1753)を中心に、『百科全書』(1751–)が刊行された啓蒙主義時代特有の様々な議論のただなかにおいて、セールの理論の独自性を明らかにしようと試みた力作である。

本論文の学術上の意義は、従来あまり注目されることのなかったセールの『和声の諸原理』における言説を多数の第一次資料との関係において読み解き、そこでの音楽理論上の議論が、同時代人のブランヴィルやラモー、およびオイラー、ダランベール、ルソーなどと問題意識を共有しており、相互に深く影響し合っていたことを具体的に裏付けた点にある。申請者が渉猟した第一次文献は広範囲にわたり、18世紀フランスにおける音楽理論がいかにフィロゾフたちの活発な、また時として辛辣な議論のなかで形成されていったかを具体的に示すことに成功している。

セールの理論の独自性は、数比や自然倍音列からは根拠づけられない短調の起源について、ブランヴィル、ラモー、オイラーが提唱した短調の生成方法を検討した上で、「比の原理」、「共鳴の原理」「想起の原理」といった複数の原理によって短調の起源を説明した点にある。ただし申請者は、これらの原理について、必ずしも十分な定義を与えないまま論述を進めている。また、セール特有の「二重根音バス理論」は、ラモーの「音響体corps sonore」理論では基礎付けが不可能な不協和音について、各和音に2つの根音バスを設定するものである。しかし申請者は、ラモーの「想定バスbasse par supposition」の方がより音楽的な発想と言えることには触れていない。

本論文の弱点をあえて挙げれば、啓蒙主義思想について踏み込んだ考察を行っていないこと、リーマン流の和声二元論との結びつけ方が性急であること、仏文の和訳の文意が時として伝わらないことである。しかし本研究は、博士論文としての水準は高く、今後の発展が期待できる。